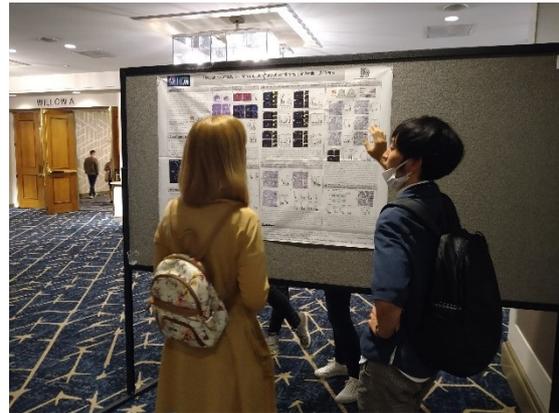
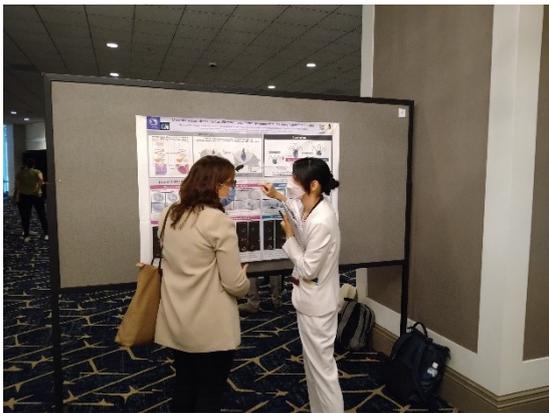


拠点形成研究交流報告：2年半振りに海外拠点での国際交流を再開しました。

約2年半のコロナ禍により、長らく現地での交流が難しい状況が続いておりましたが、アメリカでの国際交流を再開しました。東北大学農学研究科は、アメリカのカリフォルニア大学デービス校 (UC Davis) と締結している交流協定の下、長らく共同研究を実施しています。7月15-16日に約2年半ぶりに UC Davis を訪問し、共同研究者である Russ Hovey 教授と Huaijun Zhou 教授と再会し、2日間に渡り、コロナ禍での研究の進捗についての意見交換を行いました。話し合いを通して、これまでの研究成果 (2021年に国際共著論文発表) をさらに進展させるための課題を明確にし、また、両大学間で締結されている交流協定の更新に向けた議論も行い、大きな成果が得られました。

その後、7月16-20日にシアトルで開催された国際粘膜免疫学会 (ICMI) に出席しました。食と農免疫国際教育研究センター (CFAI) で実施中の研究活動を通して得られた成果を、口頭発表 (1題:野地) およびポスター発表 (3題:野地、古川、平川) することで、食と農免疫研究の重要性を世界に発信しました。



さらには、7月21-22日にカナダゲルフ大学を訪問し、ゲストセミナー (The gut microbiota induces Peyer's patch-dependent secretion of maternal IgA into milk) の講師を務めました。ゲルフ大学は、現在、東北大学農学部が交流協定の締結を目指した取り組みを精力的に実施している大学であり、目標達成に向け、大きく前進しました。野地は、今年の9月より、ゲルフ大学の客員教授に就いており、現地での研究活動のみならず教育活動にも関わっております。ゲルフ大学に訪問中は、ゲルフ大学が誇る農場を視察し、そこでのゲルフ大学—東北大学との共同研究の可能性を、Niel Karrow 教授と具体的に協議しました。



野地智法 (東北大学大学院農学研究科、食と農免疫国際教育研究センター)